

イワン・イリッチ

『学校なき社会』他

海老坂 武

フランス語では Une société sans école と題されたこの本は 1971 年に Seuil 社から出版されている。英語原題は Deschooling society であった。

まずこの本の内容を紹介しておこう。イリッチの主張はほぼ次の三点に要約しうる。①教育にとって学校（小学校から大学までを含む）は必要でない。②必要でないばかりか有害である。③したがって社会から学校と学校制度を放逐せよ。

ではイリッチにとって教育 (éducation) とは何か。教育には二つの側面がある、と彼は言う。第一はある種の型の知識の習得であり、これは職業的な能力の獲得へと通ずるであろう。第二は習得した知識の自由な実験であり、個性の発見、創造精神の涵養である。(そしてこの二つの側面が性質を異にし、しばしば対立するものであり、にもかかわらず学校制度は両者を混同していた、とイリッチは考える。)

(1) では教育の二側面にとって学校は必要であろうか。イリッチはためらいなくノンと言う。職業的な能力に必要な知識は、また一般に人間の大部分の知識は学校以外のところでなされる経験から獲得される、と。たとえば言葉がそうであり、知識習得の源泉である読書への好みもそうである、と。イリッチが学校教育にあてがうのは、わずかにある種の

特殊言語（第二、第三外国語、代数、化学分析等）と実用的な知識（タイブ術、器具修理等）のみとなる。

他方、創造精神の涵養という点について言うなら、これは相互性、無償性を必要とするので、上から下への教授 (enseignement) と免状授与に支えられた学校では不可能ということになる。

(2) しかしイリッチの学校批判は、もう一步先に進み、学校制度が必要でないばかりか有害である、という点により多くのアクセントが置かれる。繰り返して記さねばならないが、義務教育を含めてである。

学校教育は何をもたらすか。イリッチがいささかだらだらと繰り返している議論を整理すると次のようになる。(ついでに付け加えるなら、イリッチの文章はフランス語で読むかぎり、構成が奔放すぎる。もうすこし悪く言えば八方破れである。したがって批判者はどこからでもつけ込めるかもしれない。)

第一に学校教育は制度機関 (institutions) への依存心を強めさせる。教育はあらゆる場において可能である、というのがイリッチの根本的な信念であり、教育を学校制度に委ねたとき、個々の人間の自己ならびに共同体にたいする信頼感は失われて人間の無力化に行きつく、と彼は考える。この現象を彼は〈貧困の近代化〉(modernisation de la pauvreté) と呼ぶ。

第二にこれに関連して、学校教育は教育の全体性を破壊する。かつて教育は村や町において、建物の配置、労働、宗教と一体をなし、生活の全体の中に位置づけられていた。現在では特定の場所、特定の時間(期間)に、特定の〈専門家〉から、生活の全体から切り離されて行なわれている。

第三に学校教育は経済的不平等の上に成り立ち、かつ社会的不平等を促進させる。たと

えば高等教育の免状取得者と高等教育を受けられない者を比較したとき、アメリカの場合には10倍、ラテン・アメリカでは300倍から1500倍多くの国家予算が前者に使われている。義務教育年限の延長がそれだけ貧困家庭の負担を重くするという事情も考慮されていない。

のみならず、結果として成績による評価がなされ免状は社会的な価値を持つのであるが、その際に貧しい生徒が富める生徒に平等に対抗しうる可能性はきわめて少なく、社会的な不平等はますます広がるばかりとなろう。

第四に学校教育は同一カリキュラムを押しつけることによって画一化する。都市と農村とを。富んだ者と貧しい者とを。先進工業国と低開発国とを。その結果後者の住民が貧乏人として暮らしながら金持のごとくに考えるという喜劇が生じてくる。

第五に学校教育は工業社会の生産性を目的としたプログラムに貫かれている。各人の社会の中での位置はこのプログラムによって指定されてしまっている。そもそも学校制度とは工業社会の産物、西欧近代の産み出したもの、とイリッチは考える。この点で、〈子供〉(enfant)という概念自体がブルジョアジーの出現と軌を一にしている、という彼の指摘は興味深い。

さて、以上のように教育にとっての学校教育の無用性と有害性をさまざまな角度から枚挙した後に、イリッチは社会の〈非学校化〉(déscolarisation)を提唱する。とりわけ国家の教育への関与を禁止すべきことを主張する。そして国家の管理下にある学校制度にかわる新たな教育の場を次のように構想する。

まず第一に職業教育のための教育センター。あらゆる市民は生まれたときから教育パスポート、ないしはクレジット・カードを配られ、

人生のいかなる時期にでもこのセンターで無償で教育を受けられるようにする。教師は労働にたずさわる者がつとめ、最終的には万人が教師となりうるようにする。

第二に文化のコミュニケーションの網の目組織。これによって、自分の知識を他人と共有したいと思う者がこれを得たいと思う者と、いつどこでも出会える可能性を保証せねばならない。

といったことから、より具体的に、四つの〈網状組織〉(réseaux)の設立にまで構想が伸びていくのであるが、その内容については紹介を省略させていただく。

さて、こうしたイリッチのいわばユートピア的な教育構想にたいしてはいくつも疑問を投げかけることができようが、最大の疑問はおそらく「なぜまず学校なのか？」であろう。政治・経済の体制の変革なしに社会の〈非学校化〉などが考えられようか？これにたいしてイリッチはほぼ次のように答える。

ファシズムの国、デモクラシーの国、ソシアリズムの国、国によって種々の制度機関は異なっているが、学校だけは同じ構造、同じ目標を持っている。より多くの知識を習得し、より多く生産し、より有効に生産と消費を組織することによってよりよい生活に到達する、という神話に支配されている。自分にとって問題は逆なのであり、学校を検討することは、政治・経済の変革への新たな展望を開くことになるのだ、と。

どうやらイリッチにとって、〈学校〉は現代社会の在り方と目標を問う作業の戦略的足場であったようである。

イリッチという人の経歴は今のところほとんどわかっていない。ウィーンに生まれたあと、フランス、イタリア、アメリカを転々と

したらしい。確実なことは1951年から56年までニューヨークのプエルトリコ人の貧民街の教区司祭をしていたこと、1956年から数年間はプエルトリコでカトリック大学の副学長をしていたことである。この間の活動は『未来を解き放つ』(Libérer l'avenir 1971. 英語原題 Celebration of awareness 1969)からうかがうことができ、この本からは、ローマ教会のラテン・アメリカ政策——ラテン・アメリカ諸国を先進国のモデルに沿って〈近代化〉しようという政策——を「資本主義に奉仕する福音」として執拗にかつ激烈に批判する司祭イリッチの姿が第一に浮かんでくる。しかしながらすでに、ラテン・アメリカの歴史を例にとりながら、政府と外国の援助機関によって設置された小学校と技術学校が民衆に何をもたらしたか、と問うイリッチのうちに、一人の教育思想家の誕生を読みとることができよう。『学校なき社会』のあのユートピアは、ある批評家から「工業社会以後向けのデラックスな思想」と痛罵されたが、イリッチにとってみればそれは、ラテン・アメリカの貧困と悲惨の体験の中から練りあげられた構想であり、第三世界への警告の意味あいを持っていたのである。

1962年以來イリッチはメキシコに移り、クエルナバラにCIDOC(国際資料センター)を創設した。当初は、独自の考えに立ってラテン・アメリカへの宣教師を養成する機関であったらしいが、現在はむしろ、工業社会—消費文明批判のメッカとなっているようで、毎年ゼミナーを組織し、共同研究を行ない、その成果をタイプ刷りでCIDOC DOCUMENTAとして送り出している。「制度機関を転倒せよ」(Inverser les institutions. エスプリ誌1972年3月号)や『エネルギーと公正』(Energie et Equité 1973.)、『共同のくつろぎ』(La convivialité 1973.)といった

著作はこうした活動の中から生まれてきた。

こうした著作の中から現われてくる文明批評家としてのイリッチの考えのプロセスは単純化すればほぼ次のとおりである。

① 現代社会は資本主義国、社会主義国を問わず生産性を目的としかつ至上の価値としている。自然破壊、人間破壊はこの生産性を善として疑わないところからきている。

② (ここからイリッチに特有の考えが入り込んでくるのであるが) 生産という場合そこには二つの領域がある。第一は物質、富の生産、第二は〈サーヴィス〉の生産(学校、病院、社会保険制度、医療機関)で、この第二の生産をとおして人間の諸欲求が制度機関化され、人間の〈無力化〉が生じている。またこの第二の生産こそが第一の生産を補強している。

③ では生産性にたいして社会の窮極目標として何を設定するか。イリッチはここでconvivialité—conviviality という概念を持ち出してくる。(語源的意味がこめられているであろうこの語に、いちおう〈共同のくつろぎ〉という訳語をあてておこう。)〈共同のくつろぎ〉とは一方では「人間相互の自律的・創造的關係」を、他方では「人間と環境との關係」を指し示す。〈共同のくつろぎ〉社会(société conviviale)とは、個人の自発性が発揮され、(制度機関にたいしてではなく)隣人との直接的な相互依存が容易な社会であり、人間が道具と制度機関とを完全にコントロールしうる社会である。

④ そこでまず第一になすべきことは、次第次第に数をまし、次第次第に整備され、官僚化されてゆく制度機関、とりわけ〈より多く〉の生産を至上目的とする制度機関を、〈共同のくつろぎ〉の方向にむけて転倒させねばならぬ。(そこからイリッチの、学校、病院、保険制度さらには公共機関による住宅

や道路の建設などにたいする個別的・具体的な批判が展開される。))

⑤ さらにもう一步進んで、〈共同のくつろぎ〉の観点から、個人と共同体にとっての〈十分分量〉、道具と装備(技術的・行政的・司法的その他)の十分量を決定し、この上限を個人と共同体に義務づけねばならぬ。現代政治は〈不十分なもの〉をいかに供給するか、というその約束手形の上に基盤を置いており、人間を「底のないゴミ箱」にしてしまっている。70年代の新たな政治とは逆に、〈十分なもの〉についての社会的合意を形成し、その法制化を可能にする政治である。

こうして現在のイリッチの仕事は、彼の考える〈共同のくつろぎ〉社会にとって最重要な指標である〈十分分量〉をいかにして決定するか、その方法論的考察にむけられているようである。

明らかに、イリッチは全体を構想する思想家ではない。警世家、予言者といった方がふさわしいのかもしれない。現代社会の根本的な変革を志向しながらも、誰がその変革になうのか、この重要な一点についてはけっして触れないでアイディア・マンに徹しているあたりはみごとすぎるくらいである。しかし読者してみれば、決まりきった〈全体像〉などを提示されるよりも、ある特定の視角からの鋭い照射の方がより多くの想像力を刺激されるし、例外的と思われる事象から一般的な命題を帰納してくるその手つきに知的好奇心を集中することができて楽しいとも言える。

しかし、警世家、予言者、アイディア・マン、ユートピアン、詩人、どのレッテルも私の読んだイリッチにぴったりと貼りついてはくれないことも事実である。そこで唐突ではあるが、私はむしろ思想的ヒッピーと彼を呼

びたい。

まず第一に彼は国境を知らない。過去の生活においても、言語においても。彼の著作は同時にすくなくとも3ヵ国語(英、仏、西)で発表され、彼自身は6・7ヵ国語を自由にあやつるとのことである。

第二に彼は思想的に身元が不明である。過去の思想家を援用することはめったにないし、引き合いに出すときにも系統的にはなく、勝手気儘に拾ってくるといった仕方である。ルッター、ルッソー、シモーヌ・ヴェイユなどに近づける人もいるが、無宿者と考えた方が理解の妨げにならないであろう。

第三に彼の思考そのものがヒッピーの存在と同じく、現代工業社会、消費文明の落し子というか、すくなくともこれによって深く条件づけられていること、にもかかわらずこれにたいするもっとも根底的な異議申し立てとなっているという二面性がある。じっさい彼の現代社会の分析は、工業社会とか消費文明という発想の軸を立てればすぐその周囲に群がってくる言葉を組み合わせただけの、かなり貧困なものであり、具体的な体験の支えがなければ一つの表現として持ち堪えられなかったであろう。逆に言うなら、体験を掬い上げる言葉の出自がうさんくさいのである。ちょうど未来論者たちの議論のように。幸か不幸かイリッチには体験自体の発させる声があった。その声が未来論者とは逆の結論へと彼を導いたと言える。(実を言えばこうした紹介文では伝えることのできないこの声こそイリッチの生命であって、それが借りてきたような言葉、強引にでっちあげたような言葉にも力を付与している。)

もう一つ付け加えるなら、どうやらイリッチは生活形態においてもヒッピーから遠くないところにいるようである。この9月に東京で数日をすごした際、彼はホテルなどという

場所には泊まらずに初対面の人間の家に居候を続けたとのことである。司祭イリッチをヒッピー扱いするのはいささか申し訳ない気もするが、考えてみれば、最初の福音の使徒たちはまぎれもないヒッピーではなかったか。

1974年10月

Ulrike Hauser-Suida,
Gabriele Hoppe-Beugel:

*Die Vergangenheits-
tempora in der deutschen
geschriebenen Sprache der
Gegenwart*

諏訪 功

本書はその副題 Untersuchungen an ausgewählten Texten が示すとおり、現代ドイツ語の書きことは、とくにその過去時称、すなわち過去形 (Präteritum)、現在完了形 (Perfekt)、過去完了形 (Plusquamperfekt)、および時称の一致 (Consecutio temporum) と二重の書きかえ (Doppelumschreibung) に関する実証的な研究である。資料はマンハ

イムのドイツ語研究所 (Institut für deutsche Sprache) 所蔵のものから、いわゆる純文学の作品を2篇、いわゆる中間小説を2篇、啓蒙的な自然科学論文を2篇、政治家の回想録を1篇、新聞の政治欄約半月分を選んで用い、必要な場合には、他の資料をも用いたと記されている。資料はすべて散文である。巻末にまとめられた文例と参考文献表を含めて、全体は406ページにのぼる大冊であり、数字と数表に満ち満ちている(下表を参照)。

この表についての詳述は避けるが、要するに調査された全資料のなかにあらわれる過去時称形の総計は25262であり、そのうち過去形は19955(78.99%)、現在完了形は3109(12.31%)、過去完了形は2198(8.70%)であることが読みとれる。この数字がはたして十分に大きいかどうか、すなわち一般的な結論を導きだすに足る統計上の量であるかどうかはわからないし、2人の研究者自身も、これらの資料の質的な片寄りを認め(S. 27)、さらにまた複合文における時称の一致などについては、統計的な研究方法の限界を認めている(S. 15)。しかしこれらの留保にもかかわらず、本書における歴大な数字の処理は、ドイツ語研究所という大きな組織を俟っては

TABELLE I.

Die Vergangenheits-tempora in den untersuchten Werken

	CLOWN	HOMO	MORD	HERZ	SER	NAT	ERINN	FAZ	Σ
Perf.	303	408	243	426	819	148	338	424	3109
	4,77	8,62	5,10	49,59	29,60	37,85	8,35	31,43	12,31
Prät.	5428	4061	4227	288	1723	219	3234	775	19955
	85,5	85,84	88,71	33,53	62,27	56,01	79,87	57,45	78,99
Plusqu.	620	262	295	145	225	24	477	150	2198
	9,76	5,54	6,19	16,88	8,13	6,14	11,78	11,12	8,70
Σ	6351	4731	4765	859	2767	391	4049	1349	25262